

他科の先生に
知って欲しい

豆知識・・・小児科編①

子どもの成育環境と生きる力



こまざわ小児科 駒 澤 勝

最近日本では、医学の発達のお蔭で、子どもの病気が、特に重い病気が随分減った。日本の子どもの健康は世界第一級である。それだけではない、経済の発展とともに、衣食住は言うに及ばず、スポーツ、遊びや娯楽、勉強の支援、交通手段など子どもたちがのびのびと健やかに育つ環境はすっかり整えられてきた。考えてみると、ほんの4、50年前まで、誰もが今よりはるかに過酷な子ども時代を強いられたのだから、それはそれでとてもめでたいことである。

しかし、我々の過ごした厳しい子ども時代も悪いことばかりではなかった。度重なる病気を乗り越えながら、子どもは耐える力を身に付けた。弟を失った姉は教えられずとも自然に命の大切さが理解できた。夜毎咳に悩まされた子どもは、他人の咳の苦しみが解り、いつの間にか思いやりを備えるようになった。熱で体がだるい時、仲間の掛けてくれたいたわりの言葉や荷物の肩代わりの有難さが心に沁みだした。そして友だちが同じ様に熱を出した時、当然の如く声を掛け、手を差し伸べるようになった。食べ物が充分ないゆえに、兄弟で少ないお菓子を分け合うのは当然だった。毎日遠距離を徒歩通学した子どもはやがてマラソンでは何時も一番になるようになった。寒くても暑くても、耐える以外道はなかったお蔭で、皆随分たくましくなった。姉からのお下がりで大きめの服も、妹は誇らしくそして大切に着た。貧しさゆえに、新しい鉛筆1本も宝物だった。挙げればきりが無い。少し強がり言えば、思いやりや、優しさ、本当の生きる力、助け合う知恵等を身につけるにはもってこいの環境だった。

わが子に、苦勞無く、健やかにすくすくと育ててほしいと願うのは何時の時代のどの親御さんも同じだ。今はその願いもほぼかなって、例えば一寸した症状でもすぐに小児科を受診することができる。すると最新の知恵と最良の薬で苦痛は最小限で済み、最短期間で治まる。それが当たり前になっている。

でも、こうして大した熱も出さず、咳や下痢もあまり経験せず元気に大人になったとして、自分の子が病気になった時その苦しみの質や程度が解るだろうか。同じように、体や心の痛みを体験せずして、思いやりの心を養うことは本当にできるのだろうか。全てが与えられる環境で育って、避けられない逆境に自ら立ち向かうことは可能だろうか。恵まれた環境と将来の夢や未来への希望は両立するのだろうか。何となく無気力に見える多くの子どもたち、今増加一途の虐待や心ないじめ、家庭崩壊などの問題の奥底に、苦勞無くして育つ子どもたちの最近の環境が大きく関わっていないかと心配になる。

病気も、貧乏も、少し過重な負担も、子どもが育つには大切な栄養素だと思う。わざわざ求めるほどではないにしても、病気や様々な苦勞も、少しおおらかに見守ったらどうだろう。